

2025年度 国際学会・シンポジウム開催助成 実施報告書

明治大学国際連携本部「2025年度国際学会・シンポジウム開催助成」により、2025年11月15・16日に実施した「東アジア古印研究国際学術シンポジウム」についての実施結果を報告する（以下敬称略）。

1. 申請者および学内講演者・通訳者

(1) 申請者：

文学部・准教授 中村 友一

(2) 学内講演者：

中村友一（上掲），高村武幸（文学部教授），石川日出志（名誉教授／研究・知財戦略機構研究推進員），矢越葉子（研究・知財戦略機構研究推進員）

(3) 通訳者：

石黒ひさ子（研究・知財戦略機構研究推進員），陳泓錚（明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程）

2. 国際学会・シンポジウムの概要

(1) 学会・シンポジウム名

和名： 東アジア古印研究国際学術シンポジウム

英文： International Symposium on Ancient Seals in East Asia

中文： 東亞璽印國際學術研討會

(2) 開催日

2025年11月15日（土）・11月16日（日）：

(3) 会場

明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント1階

11月15日：多目的室，11月16日：グローバルホール

(4) 開催形式

主催： 明治大学日本古代学研究所，上海・復旦大学出土文献与古文字研究中心

共催： 岩手大学平泉文化研究センター，山東大学文化遺産研究院，日本中国金石学社

後援： 明治大学国際連携本部

(5) 開催方式

対面方式を基本としたが，訪日が困難となった中国側発表者5名についてはオンラインによる研究発表とした。

なお，開催に合わせて、『東アジア古印研究国際学術シンポジウム 東亞璽印國際學術研討會 論文集』（本文169頁）を作成・配布した。

3. 開催報告

(1) 会議日程

□11月15日（土）： 明治大学グローバルフロント1階 多目的室

・09:30 開会式 挨拶：石川幹人（明治大学博物館館長），劉釗（復旦大學出土文獻與古文字研究中心），朱艷萍（上海書画出版社）。記念撮影。

・10:00-10:40 基調講演1 孫慰祖（上海博物館，中國美術學院）：璽印名實辨正二則

・10:40-11:20 基調講演2 劉釗（復旦大學出土文獻與古文字研究中心）：談一方長銘的戰國璽印

- 11:20-12:00 基調講演3 石川日出志（明治大学）： 璽印考古学の実践
12:00-13:30 昼食
- 13:30-13:50 発表1 趙平安（清華大學人文學院）： 三晉璽中の“鹽城”與清華簡〈兩中〉の文本形態
- 13:50-14:10 発表2 吳良寶（吉林大學考古學院·古籍研究所）： 談談部分齊官量陶文的年代及相關問題
- 14:10-14:30 発表3 唐存才（上海應用技術大學人文學院）： 山東聊城茌平所出一枚錐形陶璽初考
- 14:30-14:50 発表4 紀帥（吉林大學考古學院·古籍研究所）： 戰國古璽史料辨偽及相關問題
- 14:50-15:10 発表5 李鵬輝（安徽大學漢字發展與應用研究中心）： 新見“事饒”璽考
15:10-15:20 休憩
- 15:20-15:40 発表6 屈彤（福建師範大學文學院）： 晉成語璽的文字形體演
- 15:40-16:00 発表7 松村一徳（東京学芸大学）： 秦封泥中の戰國期封泥
- 16:00-16:20 発表8 熊長雲（故宮博物院）： 秦始皇金庫の架構—基于秦代禦府封泥的考察
- 16:20-16:40 発表9 王偉（陝西師範大學文學院）： 魚鈕秦官印輯考五則
- 16:40-17:00 発表10 咎金國（山東省文物考古研究院）： 山東地區出土漢代印章初步研究
- 17:00-17:20 発表11 劉海宇（山東大學文化遺產研究院）： 山東考古出土漢代玉印考述
- 17:20-17:40 発表12 陳建勝（溫州大學美術與設計學院）： 溫州博物館藏印概貌
- 11月16日（日）： 明治大学グローバルフロント1階 グローバルホール
- 09:30-09:50 発表13 杜傑（邯鄲學院）： 邯鄲金質“關中侯印”的發現及重要意義
- 09:50-10:10 発表14 胡俊峰（浙江傳媒學院）： 近一堂藏古璽印考釋
- 10:10-10:30 発表15 谷豊信（東京国立博物館）： 秦漢封泥の変遷から見た「皇帝信璽」封泥の年代—東京国立博物館所蔵封泥のX線画像とCT画像を中心に—
- 10:30-10:50 発表16 下田誠（東京学芸大学先端教育人材育成推進機構）： 安杖子封泥からみた中国東北部の秦県の復元
10:50-11:10 休憩
- 11:10-11:30 発表17 張傳官（復旦大學出土文獻與古文字研究中心）： 秦漢璽印簡牘所見姓名雜考
- 11:30-11:50 発表18 任攀（復旦大學出土文獻與古文字研究中心）： 漢代齊楚封泥反映的郡國行政模式對比研究
- 11:50-12:10 発表19 黃艷萍（江南大學）： 西北漢簡所見漢代印文資料整理與研究
12:10-13:30 昼食
- 13:30-13:50 発表20 高村武幸（明治大学文学部）： 官印を誰が捺したのか
- 13:50-14:10 発表21 大塚紀宜（福岡市埋蔵文化財センター）： 「漢委奴国王」金印の鈕改作の意義に関する試論
- 14:10-14:30 発表22 朱棒（湖南師範大學歷史文化學院）： 北朝龜鈕官印的考古學研究
- 14:30-14:50 発表23 孔品屏（上海博物館）： 上博藏宋代私印的整理與研究
- 14:50-15:10 発表24 姜熊烽（上海中國書法院）： 從日本室町私印看宋元印風的域外影響
15:10-15:20 休憩
- 15:20-15:40 発表25 中村友一（明治大学文学部）： 日本古代における瓦への押印の意義
- 15:40-16:00 発表26 青木敬（國學院大学文学部）： 奈良時代の刻印土器—平城宮・京出土資料を中心に—
- 16:00-16:20 発表27 矢越葉子（明治大学日本古代学研究所）： 土器に印を捺す意味—「美濃国」印施印土器の検討—
- 16:20-16:40 発表28 林静怡（南京大学歷史学院・立教大学文学部）： 西夏文字押印の

書法研究

・16:40 閉会式 挨拶：石川日出志（明治大学日本古代学研究所）

（2）参加者数・内訳

日本側講演・発表・通訳者 17 名，中国側講演・発表者 18 名，一般参加者（事前登録・対面）34 名，計 69 名。なお，一般参加者では東京圏各大学の大学院生や留学生の参加者が多かった。

（3）開催の目的・成果・課題

①. 開催の目的

古代中国の印章（璽印）文化は，東アジア各地に広く普及して現在に至る。その古印に関する研究は中国と日本において長い歴史と蓄積があり，文字学・歴史学・考古学研究でも重要な意味をもつ。古印資料は，従来は各地の博物館・美術館・個人の所蔵印や封泥資料が主であったが，近年では遺跡の考古学的調査で発見された古印・封泥，および瓦や土器に見られる押印・刻印資料など，古印研究の方法・視角と対象の範囲が大きく広がっている。

中国古代の印章（璽印）については，これまで，今回の主催・共催団体である中国・復旦大学出土文献与古文字研究中心，岩手大学平泉文化研究センター，山東大学文化遺産研究院，日本中国金石学社などが連携して，日中両国で国際研究集会を開催してきており，明治大学日本古代学研究所（国際日本古代学研究クラスター）も共同（協働）してきた。その蓄積を基盤として，2024 年 9 月に，上海・復旦大学を会場として『方寸萬象—中國古代璽印研究國際學術研討會—』を開催し，それを継承して日本側で開催する趣旨から今回の国際シンポジウムが企画された。

これまでの蓄積を継承するだけでなく，これまで主に中国古代を研究対象としてきたが，日本の古代に導入された印制度に関する研究もあり，それと接続することも今回の重要な目的である。

②. 共同研究の成果

今回の国際シンポジウムの成果についてはいくつものことが挙げられるが多岐に亙るため，次の 5 点についてのみ記す。

第一は，これまで日中両国で協働を蓄積してきた＜中國古代璽印研究國際シンポジウム＞を明治大学で開催できたこと自体が挙げられる。古印研究に関しては，これまで日中両国間で共同開催してきたが，今回の基調講演 3 本，研究発表 28 本もの研究成果で構成するシンポジウムは中国以外では初の機会である。中国古印研究は，もちろん中国で長い歴史と蓄積があるが，太田孝太郎（夢庵）をはじめ，日中連携による研究成果の土台の上に今の研究がある。今回のシンポジウムが，古印に関する日中の共同研究がさらに進展する契機となるであろう。

第二は，中国古印研究に考古学的手法を採用することを推進するよう呼びかけられた点である（基調講演 3・石川日出志）。中国古印研究は長い歴史があるが，羅福頤の基礎研究に孫慰祖が考古学情報（墓葬の共伴遺物の年代）を加えることで，印文や鈕形の時代判別が著しく明瞭になった。そこで考古学者として石川は，璽印自体を考古資料と扱って型式分類し，墓葬内の出土位置や地理的分布などを検討する「璽印考古学」を提唱し（石川 2019「中国璽印考古学の提唱」中日学術論壇 公元前 3 世紀至 10 世紀東亜地区考古和歴史学研究／於：中国社会科学院考古研究所），今回もそれを中国でも普遍化するよう求めた。朱樺も璽印考古学を精力的に実践しており，今回は発表 22 で北朝の亀鈕の型式分類と系譜関係の整理を提示した。朱は，これまで後漢代から晋代までの亀鈕印の型式分類と系譜を論じており，それをさらに南北朝代まで拡張し，今回は北朝に焦点を当てた。朱は明言しないが，北朝の亀鈕の鈕と印台の大型化は，印が封泥用の印から文書に押捺する印へ，そして官人から官職の印へとという璽印の歴史のもっとも大きな転換期を具体的に論じることが可能となる点で，極めて重要である。講演 21 の大塚紀宜も，四夷の一員である倭の奴国が受けた印が，なぜ博多湾口の志賀島南端で発見されたかの考古学的判断を総合する。発表 11 の劉海宇は，山東省内の墓葬から出土した前漢代の玉印 12 例を取り上げて，詳細な検討を行う。例えば出土位置を確認できる例は，腰部 5 例，頭部附近 3 例，脚部 1 例であり，石川 2024 論文の指摘を跡付けつつ嚴

密ではないことを指摘する。

注目すべき**第三**は、発表 15 の谷豊信が、東京国立博物館蔵（陳介祺旧蔵）封泥を X 線画像と CT 画像を併用して、文書や物品を封泥する方法を詳細に描き出した点である。孫慰祖が、封泥の形態と表面の外形的特徴をもとに封泥匣を復原したのを、X 線画像と CT 画像の併用によって封泥内の締縛の状況を鮮明に可視化・類型化して、年代論に言及する。日本の所蔵封泥には数に限りがあり、一方中国で発見された封泥は膨大な数に上り、一か所で集中出土した例も少なくない。それらの分析が今後急速に進展するに違いない。

第四は、基本的な事項ながら、古璽印に関する詳細な研究が積極的に論じられた点である。基調講演 1 の孫慰祖は、「烙馬印」の実例と唐宋代の文献に見える「圖書」を取り上げた。馬の尻に焼き印を捺す烙馬印の諸例を検討し、印面文字の形態的特徴から烙馬印の判別を論じ、「圖書」もしばしば印の意とされるがむしろ蔵書印とみるべきことを論じた。発表 9 の王偉は秦代の魚鈕官印 12 例を渉猟し、従来南方の両広地域に目立つことが指摘されてきたが、じつは山東省域の事例があることに注意を喚起する。これは、前漢以後の蛇鈕印が南方諸族に対する印鈕であるものの、蛇鈕が盛用された秦代では河北省域の官印も認められることと通じる。印鈕の形態・形式とその運用が、前漢代に官僚制度と合わせて整備されることと関係するとみられる点で重要である。

第五は、日本古代の印に関する研究発表が 4 本にも及んだ点である。日本古代印については、国立歴史民俗博物館が 1992-94 年に集成的基礎研究を行い（『日本古代印集成』1996）、2014 年に日韓の博物館で共同して研究と展示を行った（『文字がつなぐ古代の日本列島と朝鮮半島』）などの先行研究がある。明治大学日本古代学研究所では、吉村武彦を代表者とする研究プロジェクトで古代日本の墨書・刻書土器の集成によるデータベース作成・公開をすすげており、その中で瓦などへの押印資料も取り上げてきた。その延長として今回中村友一が瓦の押印の意義を論じ（発表 25）、矢越葉子が美濃国の押印資料を検討した（発表 27）。古墳～古代の考古学研究が専門の青木敬も美濃国と平城宮・京の押印資料の詳細検討を行った（発表 26）。石川の璽印研究も、日本古代学研究所が 20 年来重ねてきた、日本と中国の古代学に関する研究交流の中でその基盤が築かれたように、日本古代学研究所の永年の国際的・学際的研究の重要性はあらためて言うまでもない。これらの研究発表により、古代日本の印関係資料の総合研究も今後進展すべき課題であることが明示されたといえよう。

③. 成果と課題

中国と日本の古代璽印の研究は、長い歴史と蓄積がありながら、璽印考古学の提唱など、新たな研究方法も採用されて新局面を迎えつつある。今回、中国の第一線の古印研究者を招聘して明治大学において「東アジア古印研究国際学術シンポジウム」を開催できたことは、まさしく東アジア古代の璽印研究の最前線を確認し合う格好の機会であった。特に璽印考古学に関しては中国側でもその重要性が認識され、すでに墓葬出土資料の詳細研究が始動している。その徹底が璽印研究の新局面を切り拓くはずであり、日中両国の研究者による今後の共同研究の促進が必要である。すでに来年度、上海の復旦大学において次の国際シンポジウムが計画されているが、それと並行して中国の古代墓葬における璽印出土例の共同研究の打合せが進んでいる。今回の明治大学における国際シンポジウムが、こうした新たな璽印研究の歩みの一里塚の役割を果たしたものと考えている。

【謝辞】

今回の「東アジア古印研究国際学術シンポジウム」の開催にあたり、上海・復旦大学出土文献与古文字研究中心、山東大学文化遺産研究院、岩手大学平泉文化研究センター、日本中国金石学社、上海書画出版社、および所属研究者の皆様にご格別な御支援と御協力を頂いたことに、特にこの場を借りて御礼を申し上げる次第である。

また、今回参加された諸先生方から、明治大学の充実した環境の中で国際シンポジウムが開催されたことに感謝の意が示されたことを明記しておく。明治大学国際連携本部および研究・知財戦略機構の支援に感謝する。